

## 質の高い大学教育推進プログラム 実施状況報告書

大 学 等 名	福井県立大学		
取 組 名 称	海と湖を舞台とするやる気触発プログラム		
申 請 区 分	教育方法の工夫改善を主とする取組		
取 組 期 間	平成20年度～平成22年度（3年間）		
取 組 学 部 等	海洋生物資源学部・海洋生物資源学科	取組担当者	広石 伸互
W e b サ イ ト	<a href="http://www.fpu.ac.jp">http://www.fpu.ac.jp</a>		
取 組 の 概 要	<p>本取組は地域住民との共同活動や卒業生等との交流を通じて、自主・自立の精神とともに実践力と総合的な理解力を兼ね備えた学生、すなわち高い人間力をもつ学生を育み、その活動を通して地域活性化に貢献することを狙いとするものである。「やる気触発ミキサー」、「山川里海連関学」、「若狭総合地域学」および「地域活性化演習」などの科目を通して、幅広い視野と深い専門的知識を土台として海洋生物資源の育成と利用にかかわる諸問題の解決に貢献する人材を養成することを目的としている。</p>		

### 1. 取組の実施状況等

#### ①取組の実施状況

(1) 取組の実施体制：マネジメント体制としては、専任の教育推進員1名と事務担当のアルバイト3名を雇い、教職員18名の計22名で教育GP推進チームを結成した。教職員の内訳は教員16名と職員2名であった。教員の所属学部は、主に海洋生物資源学部であったが、別部局である学術教養センターの教員も本プログラムの「地域活性化演習」に参画した。大学の支援体制としては、本プログラムの企画案作成時に全学レベルで教員数名が関与し、案を練り上げた。後で述べるが、本プログラム終了後の経済的サポートも全学レベルで検討中であり、認められる可能性が高い。

(2) 取組の実施は計画通りに行い、①1年目（平成20年度）には、1年次生に対して「やる気触発ミキサー」を行い、新入生の人間力向上への刺激を行った。2年目には、新1年次生に対し、1年目同様、「やる気触発ミキサー」を行い、同様の刺激を与えた。その年の2年次生に対しては「山川里海連関学」と「若狭総合地域学」を行い、若狭地域の自然を理解し、地域の人々との関係を深めた。3年目にはそれまでと同様、新1年次生に対して「やる気触発ミキサー」、新2年次生には「山川里海連関学」と「若狭総合地域学」を行った。新3年次生には新たに「地域活性化演習」を行い、地域の人たちと協同して地域の自然を調査し、体験的理解をするとともにまちづくりの活動に協力した。3年目にはさらに、本プログラムの活動の総括を行った後、地域への発信を行った。最後に本活動に熱心な学生に対して地域活性推進者認定書を発行した。②取組に参加した学生と教員の数は、「やる気触発ミキサー」では141名の学生に4名の教員が担当し、「山川里海連関学」では95名の学生に3名の教員が担当した。「若狭総合地域学」では47名の学生に4名の教員が担当し、「地域活性化演習」では24名の学生に9名の教員が担当した。

(3) 社会への情報提供活動では、本プログラムの企画の情報を積極的にマスコミに提供し、以下に示す多くの記事やニュースになった。すなわち、福井新聞に5回、日刊県民福井に4回、毎日新聞と朝日新聞に各2回、読売新聞に1回掲載された。また小浜ケーブルテレビに16本（1本につき約10回放送した）が放映された。

地域と連携した取組としては、「若狭総合地域学」の中で行われた「水産物加工体験」では、競りや加工体験をしている学生やそれを指導している地域の加工業者たちの様子がケーブルテレビで放映され、本プログラムおよび地元の水産加工組合の活動が紹介され、地域において高い評価を得た。

また3年間の活動をまとめた報告書、リーフレットやDVDを作成し、教育GPの活動を行っている87大学や本学学生の出身高校169校および本プログラムの関係者などに広く配布し、広報活動を行った。

## ②. 取組の成果

本プログラムは計73回の個々の企画からなる。1年次生を対象とした「やる気触発ミキサー」では3年間で計24回の企画を実施し、学生の意欲を刺激した。アンケート調査の結果、学生はこの試みに満足していることが明らかになった（後述）。

2年次生を対象とした「若狭総合地域学」では、計14回の体験学習を企画したが、その中で「定置網体験」と「水産物加工体験」は学生に対して、大きい影響を与えた。そのことは学生たちの感想文と体験後の学生たちの行動（地域活動への自発的参加の増加）から読み取れる。前者は定置網漁業と競りを行う体験であり、後者は競りから始まり、水産物を加工し食品にするとともに、不要となったアラを処理する体験であった。これらの体験を通して、本学海洋生物資源学科の学生は、自然界で泳いでいる魚がどのような過程を経て食品となるかを学び、またそれを生業として、経済活動をしている地域の人たちの生きざまを体験した。大学では聞けない生の声は学生たちに強烈に響いたようであり、地域が主催する行事に学生たちが積極的に参加しようとするきっかけになった。地域の人々との交流は学生が人間関係を構築する上で大変よい経験になったと思われる。そのことは学生たちの言動からも読み取れる。地域の人たちもそのことを感じとり、小浜市制60周年にあたる今年の祝賀事業の一つである「食のまつり」の準備委員会に学生たちの参画を求め、学生たちも積極的に対応している。それまでには考えられなかったことである。また、それまで私たち教員が企画してきた上述の「若狭総合地域学」の「水産物加工体験」の企画にあたって、地域の人たちと協議するなど、本プログラムを経験した学生たちの積極性・自主性が確実に向上したことは、本プログラムの大きな成果と言える。また、学生たちは「地域特産魚を用いた新食品開発グループ」、「ウミガメ保護調査グループ」および「ライフセービンググループ」を結成し、活発に活動している。このように、本プログラムを通して地域活動を活発に行うようになったことも大きな成果である。

学生たちに対して行ったアンケートでは、本プログラムに参加した学生の79%が「参加してよかった」と答えている。その中で満足度が高かった企画は、「やる気触発ミキサー」の中の「海や湖沼に親しむ」（100%）という体験をともなうプログラムや「卒業論文発表会参加」（88%）という将来の自分の成長を期待できる経験に加えて、「若狭地域の水産業を知る」（75%）および「水産業をグローバルにとらえる」（75%）という水産業をローカルおよびグローバルに理解する取組であった。

本プログラムの終了時に、小浜市長をはじめ地域の人々に本プログラムの内容をまとめて発表した時には、市長や地域の人々から高い評価をいただいた。彼等の反応から、小浜市の今後の運営あるいは地域の活性化活動の中で、本プログラムによって活性化された学生たちへの期待が大きいことが読み取れた。

### ③. 評価及び改善・充実への取組

取組の評価・改善体制としては、アンケートを実施し、その結果を次に実施する企画に反映した。感想文も個々の企画ごとに書かせるようにして、学生たちの意見を反映するようにした。すでに述べたが、本プログラムに参加した学生たちの79%が「参加してよかった」と答えたので、本プログラムをこのまま継続することは学生にとってよいと判断し、アンケート実施後も大筋の内容は変更せずに進めることにした。個々の企画については、満足度に高低が見られた。例えば、満足度の高い企画としては1年次生に対して行った「やる気触発ミキサー」の「海や湖沼に親しむ」(100%)という体験をとまなうプログラムや「卒業論文発表会参加」(88%)であった。アンケート結果と学生の感想文から、前者では海や湖の中での自然体験の喜びや後者では将来に卒論発表できる自分への期待感がこれらの企画の満足度を上げていることが読み取れた。これらの満足度の高い企画はその後も継続することにした。一方、満足度にばらつきが見られたのは、「先輩卒業生によるアドバイス」と前述の「若狭地方の水産業を知る」で、満足度は前者で69%および32%、後者で75%および30%であった。満足度の低い企画は中止し、高い企画のみを継続した。教室での講演を主にした場合や講師の話す内容が理解できなかった場合に満足度が低くなるのではないかと推察される。

2、3年次生に対して行った取組の達成度は、学生たちの地域活動への自発的な取組と地域からの呼びかけに対する積極的な対応を指標とした。これらの自発性の向上が見られた例を以下にあげる。①2年次生への企画である「若狭総合地域学」の中の「水産物加工体験」では、それを高く評価した体験学生が、次年度の企画および実施に積極的に関与している(1名)。②また、地域の行事である「食のまつり」にも企画段階から積極的に参画している(2名)。③「地域特産魚を用いた新食品開発グループ」(2名)、「ウミガメ保護調査グループ」(10名)および「ライフセービンググループ」(10名)が結成され、活発に活動している。本プログラムを通して、地域活動に自発的に参加し、企画する学生が確実に増加している。

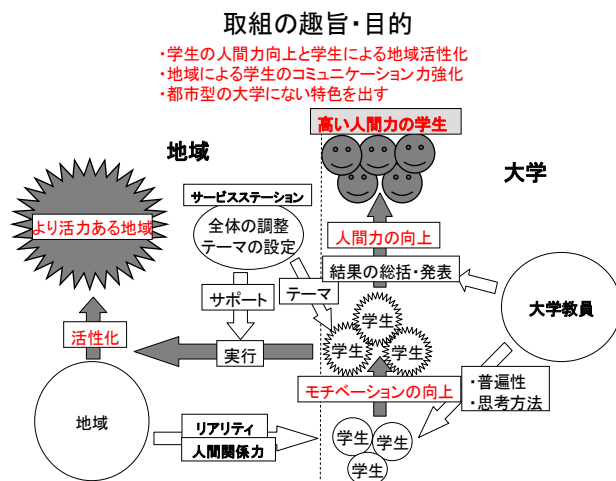
#### ④. 財政支援期間終了後の取組

基本的には従来と同様のことを行うが、規模を縮小する。過去3年間の教育GPの実施によって、地域の人たちと学生たちとの距離は極めて近くなったので、地域行事への学生参加の要望が増加し、これらの新たな企画の割合が増加するとすることは明らかである。現に、小浜市から将来のまちづくりをめざして、市民会議委員に、学生を推薦するよう依頼文が届いている。

予算は本学と小浜市に要望しているが、両者ともに本取組を高く評価していて、予算を獲得できる可能性が高い。

## 2. 取組の全体像

福井県立大学の海洋生物資源学科（平成21年度より海洋生物資源学部に昇格）のある若狭地域は、山川里海の豊かな自然とともに豊富な海洋生物資源に恵まれている。また、この地域は、全国的にも食育先進地域であるとともに、様々な住民主体の地域おこしなど活発な活動がなされている。本学の学生たちは、豊かな自然を体験するとともに密な人間関係と深い地域愛に支えられた活動の一端を担うことによって、やる気と実行力、すなわち人間力の向上が期待される（図参照）。



本事業では、このような地域を舞台として、1)「やる気触発ミキサー」、2)「山川里海連関学」、3)「若狭総合地域学」および4)「地域活性化演習」を企画し、その活動体験を通じて、自主・自立の精神と実践力と総合的な理解力をもつ学生、すなわち高い人間力をもつ学生を育み、その教育活動を通して地域活性化に貢献していくことを狙いとした。事業の具体的内容としては、1)では、本取組と類似の実

践体験を持つ他大学生や実社会で活躍している本学卒業生との交流の場を提供し、同世代と先輩との交流によって強い影響を与え、精神を活性化状態へと移行させることを目的とした。3年間で計24回の機会を設け、計141名の学生が参加した。2)では、学生に山、川、里、海は互いに連関していることを理解させることを目的とした。2年間で計32回の機会を設け、計95名の学生が参加した。3)では、その豊かな自然の中で営まれる産業（林業、農業および水産業）に従事する地域の人々との交流および指導を受ける体験学習である。2年間で計14回の機会を設け、計47名の学生が参加した。4)では、学生の自発的な地域活性化活動を行うように導いた。この活動は教員主導型と学生主導型に分けて活動をおこなった。前者ではさらに次の2コースに分けて実施した。①大学の環境保全に関する高い専門性を活かし、地域の陸域が河川や海の水域にどのような影響を与えているかを調査する。②大学発ブランドメニューを試作し販売する。1年間で、計3回の企画を設け、24名の学生が参加した。一方、後者では学生が自発的に「地域特産魚を用いた新食品開発グループ」、「ウミガメ保護調査グループ」、「ライフセービンググループ」の3グループを本プログラムの中で結成あるいは活性化し、現在も活動中である。

プログラム終了時には実践した成果を総括し、地域の人たちの前でプレゼンテーションした。

評価・改善の方法としては、アンケート、感想文、自発的取組を指標としている。学生にとって満足度の高い企画は存続させ、地域活動を自発的に取組む学生やそのグループを高く評価し、できるだけサポートして行くつもりである。

以上の取組は、本学科で現在行っている海洋生物資源に関する専門教育のもう一方の車輪となっている。